



西港区

未来への新たな船出

開港50周年 苫小牧港特集

苫小牧港管理組合 ㊟34-5551



「砂浜に港を築く」

不可能ともいわれた、この大きなプロジェクト

永年の歳月をかけたまちを挙げての総力戦

今回の特集は開港50周年を迎える苫小牧港を紹介します



東港区

まちの発展を願う

港にかけた熱意

大きな汽笛とともに、大型船が雄大な姿を見せながら出入りする苫小牧港。「北海道の海の玄関」として物流の要衝を担い、北海道経済の発展を支え続けるこの一帯は、かつて砂浜の海岸線が続き、イワシ漁を中心に沿岸漁業が行われていました。

苫小牧港築港の始まりは大正時代まで遡ります。現在のような工業・商業港を兼ね備えた港ではなく、それまでの沿岸漁業が次第に不漁になるにつれて、沖合漁業への転換の必要性から漁港の築港が行われました。しかし、激しい潮の流れによって、砂に埋もれてしまい、技術的にも未熟で、実現を果たすことはできませんでした。大正12年には北海道庁の林千秋技師から、石狩や空知炭田で採掘された石炭の出荷経費（鉄道運賃）の軽減を図るため、苫小牧に港を築港しようとする「勇払築港論」が発表されました。これもまた、実現しませんでした。この計画は苫小牧における最初の本格的な築港計画で、砂の動きを調査し、内陸への掘削土砂の湿地埋立などの構想は、その後の計画にも多く引き継がれていくことになるものでした。

戦中、戦後は物資、特に食料難か